独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院

Osaka Rosai Chronicle

大阪ろうさいクロニクル

第２号
発行日
2022.11.1

新病院における「新たな救急体制」

副院長/救急部長　　川　端　正　明

令和４年１月１日、当院は新病院に移転しました。新病院では、高度専門医療の拡充、および救急医療を含む急性期医療の充実が図られました。救急部門では診療に必須となる放射線部門、内視鏡部門と隣接し、救急用エレベーターで３階の心臓カテーテル治療部門（３室）や手術部門（16室）へ迅速に搬送できる設計となっています。集中治療部門も同部門に隣接され、病床数をICU：12床、HCU/CCU/SCU：16床に倍増したことにより、これまで以上に救急搬送された重篤な患者さまに対し高度な専門的医療を提供できる体制となっています。

医療に求められる課題は日々変遷しています。新型コロナウイルス感染症への対応として、大阪府のフェーズにより最大で軽症・中等症コロナ病床26床、重症コロナ病床４床が運用され、重点医療機関としてその役割を果たすことが出来るようになりました。本感染症の最前線である救急部門では、陰圧空調システムを用いた救急初療ブースと、陰圧外来診察室１室を利活用し、常時感染防護対応で救急搬送症例に対応しています。

夜間・休日の診療体制も救急医療に大きく舵を切りました。円滑な救急診療を行うため当直医師を増員し、従来の当直業務から救急業務を分離独立させました。新病院では、ハートコール体制とは別に一般救急に対応する医師４名が次々と搬送されてくる傷病者を分担診療する「新たな救急体制」が構築されています。各科オンコール体制により必要に応じ専門性の高い医師が招集され緊急手術などに対応しています。さらにメディカルサポートセンターとの連携により、登録医の先生方から数多くのご紹介患者さまを受け入れています。特に急変した患者さまで“どの科に紹介すれば良いのか分からない”と苦慮するケースでは、同センターへのご一報と診療情報提供書を頂くことで円滑に救急初療から専門診療に繋いでいます。また、救急搬送された患者さまが治療を終え退院される際には、当院での診療内容をご査収頂けるよう必ず診療情報提供書を郵送しています。患者さまの再診時にその内容をご確認頂ければ幸いです。

私たちは、新病院が地域の中核基幹病院として将来にわたって急性期医療を堅持していくためには救急医療の充実が必須と考えています。人材の育成・確保に努めるとともに「地域を守る救急」を旗印に今後も積極的に応需して参ります。これからも南大阪地区の地域医療の発展を支えていきたと思っていますので、皆様方には引き続き変わらぬご理解ご支援をお願い申し上げます。

「新病院　ハートチーム」

副院長/循環器内科部長　西　野　雅　巳

清秋の候、皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

さて、大阪ろうさい病院は今年新病院となり半年以上が経過いたしました。いままで人がソフト、建物がハードとすれば個人的にもソフトは素晴らしいがハードは老朽化が進み、どうにかしないと良い医療の提供に限界があると感じていました。満を持して今年新病院となりソフト、ハードともに最高の医療を提供できる体制が整ったと考えています。大阪ろうさいクロニクルのこの号では新病院となり、さらに発展を遂げつつある循環器内科・心臓外科を中心とした医師・専門コメディカルの当院の「ハートチーム」の紹介をさせていただきます。当院では循環器内科、心臓血管外科は常にコンタクトを持ち、治療方針もカンファレンスで検討しています。また、循環器疾患は24時間体制で行われるので昨今の「働き方改革」を考慮するとマンパワーが必須と考えられます。当院「ハートチーム」の医師は循環器内科医20名、心臓血管外科・血管外科５名のマンパワーがあり、24時間いつでも最良の循環器医療が提供できる体制が整っています。さらに先ほどのハード面ですが、新病院となり、ハイブリッド手術室は旧病院の約２倍の広さとなり（心臓外科の頁に写真）、心臓カテーテル室は３つ横並びに設置され（循環器内科の頁に写真）、そのうち２台の血管造影装置はバイプレーンシステムとなっており、緊急循環器症例がいつきても十分な対応が可能となっています。その上、手術室、心臓カテーテル室、ICU（集中治療室）12床、HCU（高度治療室）16床がすべて３階の同フロアーにあり、１階の救急部からエレベーター直通で上がってこられるので移動も短時間で行われ、24時間常にスムーズに循環器疾患に対応できます。「ハートチーム」の力が最も反映される治療のひとつであるTAVI（経カテーテル大動脈弁置換術）においても新病院となり７月に無事、200例を超えることができました（下写真）。現在でもTAVIにおいては術中死亡ゼロ、術中開胸術移行ゼロの結果を残せており、当院「ハートチーム」が非常に有効に機能している証拠と自負しております。

今後とも南大阪の循環器医療に貢献できるよう「ハートチーム」一丸となって邁進いたしますので新病院体制での大阪ろうさい病院「ハートチーム」をよろしくお願いいたします。

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1．地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2．高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3．患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4．勤労者医療を担ってこれを推進します
5．働きがいのある職場づくりを推進します

診療科紹介　心臓血管外科

心臓血管外科部長　近　藤　晴　彦

大阪ろうさい病院の心臓血管外科は、1989年に開設され、30年以上にわたり、大阪府南部・堺市周辺地域の中核として診療・手術を行ってまいりました。冠動脈の病気(狭心症や心筋梗塞)、心臓の弁膜症(大動脈弁狭窄症や僧帽弁閉鎖不全症など)、大動脈の病気(大動脈瘤や大動脈解離など)、および不整脈(心房細動など)といった心臓血管外科疾患全般に関する外科診療を行っています。手術においては、救命をおこなうことはもちろんですが、生活の質(QOL：quality of life)の向上を主眼においた、質の高い手術を第一主義とし、これまで高齢者の方や重症の方にも良好な手術成績の下に積極的に心臓大血管手術を行ってきました。

心臓血管外科の手術 と聞くと、「大変危険で」、「命がけの」治療のように思われるかもしれません。特に高齢者にとっては、「体力的に耐えられない」と思われるかもしれません。実際は、予防的な治療(破裂前の動脈瘤手術など)、症状を取り除くための治療(息切れや胸痛の原因となる、弁膜症や冠動脈の病気に対する治療など)から、救命の目的で行う緊急手術(急性大動脈解離や大動脈破裂、急性心筋梗塞など)まで行っているため、確かに、100%安全ということはありません。しかし、心臓血管外科の手術は日々進歩しており、10年前と比較しても飛躍的に技術・成績は向上しています。当院においても、ここ15年間に心臓・胸部大動脈手術は2,000例以上行われ、手術死亡は約1.4%と良好な成績を残すことが出来ています。

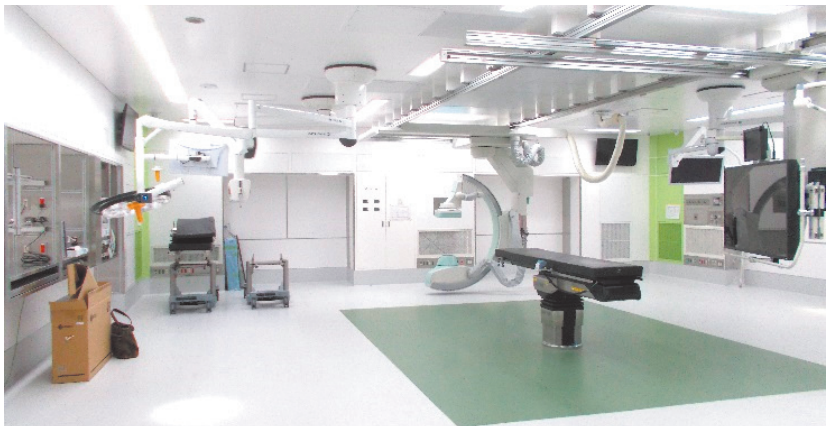
当科で手術を安全に行うには、「手術機器・治療法の進歩」のみならず「病院のハード面とソフト面の充実」が必須になります。

「手術機器・治療法の進歩」については、ここ10年で、当科の領域では「TAVI(タビ：経カテーテル的大動脈弁置換術)」と「ステントグラフト内挿術」が術式や患者選択に大きく影響しました。特に「TAVI」は、通常の外科的な大動脈弁置換術が困難な症例、高齢者を中心に選択されます。これまで200例以上(平均年齢は83.4歳)に施行し、30-days mortalityは 2 例のみというきわめて安定した治療成績です。また、「ステントグラフト内挿術」は外科的に到達しにくい部位の大動脈疾患を中心に選択され、80歳以上の高齢者でもきわめて安全に治療ができるようになりました。

また、「病院のハード面とソフト面の充実」としては、2022年 1 月から、新病院となり、当科が主に使用しているハイブリッド手術室(写真 1 ：X線透視装置と手術台を組み合わせた手術室)も旧病院の約 2 倍の広さに拡充され、専用手術機材を設置しても、手狭とならない十分なスペースを確保できるようになりました。また、集中治療室も 8 床から12床に拡充し、手術室に隣接して設置され、大阪大学の麻酔科・集中治療部と連携して管理が行われており、より重症な患者さまの管理も安心して行える体制になっています。また、術前から術後まで安全に過ごしていただくために、当院では、各専門の職種(医師、看護師、管理栄養士、理学療法士、臨床工学士、放射線技師)からなる、ハートチームがあり、それぞれの専門性を活かして手厚いサポートを行っています。さらには、様々な合併疾患があっても、総合病院としての利点を生かし、各専門の医師が対応できる体制で診療を行っています。

今後も大阪府南部・堺市周辺地域の基幹病院として質の高い専門的な治療を提供していけるよう、スタッフ一丸となって全力で努力してまいります。みなさまのご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。

（写真 1 ）



診療科紹介　循環器内科

循環器内科 不整脈科部長　江　神　康　之

このたび大阪ろうさい病院は約60年ぶりに新病院となり、循環器内科においては専用の明るく、きれいで、かつ広い心臓カテーテル検査室が横並びに３室となり、そのうち２室はバイプレーン装置を備えており（写真）いつでも滞ることなく循環器救急に対応できる体制が整っています。また、心臓カテーテル検査室のすぐ隣に集中治療室が設置され、治療後に速やかに部屋移動が可能となりました。集中治療室はICU（Intensive Care Unit）とHCU（High Care Unit）があり、それぞれ８床から12床、６床から16床と大幅に増床され、これまで以上に多数の救急患者さまへ対応できる体制が整いました。

現在、当科は20人体制で、虚血性心疾患、末梢動脈疾患、不整脈、構造的心疾患（心臓弁膜症、先天性心疾など）、心不全、肺動脈血栓塞栓症など急性期疾患を中心とした循環器疾患の全般にわたり、最新かつ、最良の医療の提供をめざして日々診療に取り組んでいます。また、循環器専門医を多数有するスタッフがいるメリットを生かして、複数のチームで、「断らない医療」実現のために24時間体制で循環器救急疾患に対応しています。

診療実績については、冠動脈形成術は年間550～600件、末梢動脈疾患インターベンションは年間130～150件、不整脈アブレーション治療年間約500件、ペースメーカー植え込み術は年間130～150件と大阪でも有数の症例数を誇る病院へ成長してきました。このように当科が成長できましたのもひとえに地域の医療機関や実地医家の諸先生のおかげと感謝してやみません。

また、臨床研究面においては、各疾患の原因の解明、治療成績の向上を目的にチームで臨床研究に取り組み、国内のみならず世界に情報を発信（堺から世界へ！）し、2020年、2021年には年間20本以上の英語論文がPubMedに掲載されており、今後も医学の進歩に貢献できるように心がけていく所存です。

大阪ろうさい病院 循環器内科は、地域の方々や近隣の諸先生方のご期待に添えるような病院になるよう日々精進してまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

シングルプレーン

バイプレーン

X線発生器と検出器が2対
（2方向の同時撮影が可能）

バイプレーン

X線発生器と検出器が2対
（2方向の同時撮影が可能）

構造的心疾患に対するカテーテル治療（SHDインターベンション）心不全治療に対する新たな一手
～僧帽弁逆流に対するカテーテル治療：MitraClip™～

循環器内科　津　田　真　希

近年、循環器領域においては構造的心疾患（弁膜症や先天性心疾患など）に対するカテーテル治療（SHDインターベンション）が目覚ましく進歩しています。当院でも大動脈弁狭窄症に対するTAVI、経皮的左心耳閉鎖術、経皮的卵円孔開存閉鎖術を導入してきましたが、今回新たに、心不全治療に対する新たな一手である僧帽弁逆流に対するカテーテル治療が導入されることとなりました。（2022年10月14日より開始）

僧帽弁とは

僧帽弁とは左室と左房の間にある弁です。弁尖や弁下組織、それらを支える左室や左房から構成され、そのいずれかが障害されると、かみ合わせが悪くなり逆流を来します。

僧帽弁閉鎖不全症とは

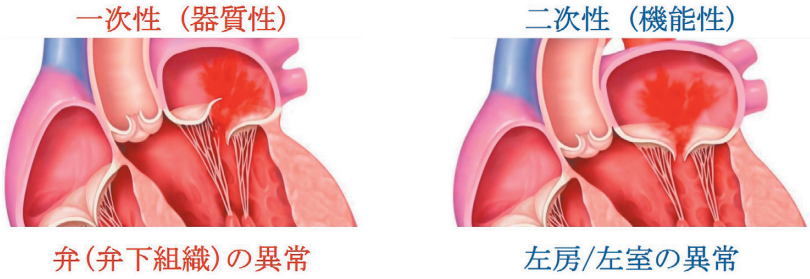
病因は大きく、弁や弁下組織に問題がある一次性(器質性)と、弁自体に問題はなく左房や左室が原因である二次性（機能性）の二つに分類されます（図１）。二次性は高齢者や心機能低下例に多く、外科的手術のリスクも高いため保存的治療を選択せざるを得ない状況でした。しかし保存的治療には限界があり、このニーズを満たすためにMitraClipTMを用いたカテーテル治療(経皮的僧帽弁接合不全修復術)が開発されました。

経皮的僧帽弁接合不全修復術

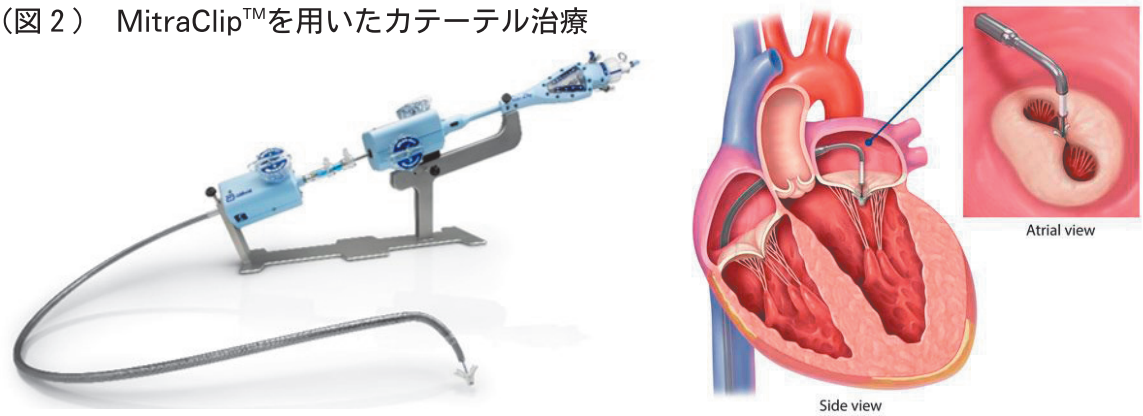
治療は全身麻酔で経食道心エコーで観察しながら行います。足の付け根からカテーテルを挿入し、かみ合わせの悪い部位の弁尖をクリップで把持することで逆流を軽減します（図２）。心停止が必要である外科的手術とは異なり、エコーでリアルタイムに観察しながら治療を行える点が最大の特徴です。治療後は術前の心不全の程度にもよりますが数日～１週間程度で退院可能となります。

当院では心臓血管外科と連携し、「ハートチーム」として適切な治療判断を行っておりますので、弁膜症や心不全でお困りの患者さまがおられましたら、ぜひともお気軽にご相談ください。

（図１）僧帽弁逆流の病因



（図２）　MitraClip™を用いたカテーテル治療



「腎臓内科のご紹介」

副院長/腎臓内科部長　山　内　　淳

腎臓内科では、腎炎や腎機能低下などの急性及び慢性の腎臓病の診療はもちろん、各種電解質異常や二次性の高血圧症の治療など多岐にわたる疾患の診療を行っています。特に高齢化社会の到来とともに慢性腎臓病(CKD)の患者さまが非常に増加しており、成人の８人に１人、80歳以上では５人に２人はCKDと言われている中、これらの患者さまの診療も、地域の先生方と協力しながら担当させて頂いています。

患者数はこれほど多いのに、まだ腎臓内科を標榜している医療機関は少なく、専門医療のできる医療機関は限られていますが、当院では腎臓内科という領域が一般的でなかった頃から長期にわたり、たんぱく尿などの検尿異常やその精査としての腎生検をはじめ、末期腎不全に陥った際の透析療法まで幅広く診療を行っています。スタッフも腎疾患領域の各種専門医資格を有するベテランから新進気鋭の若手まで充実しており、大阪府下でも屈指の医療機関と評されるよう、現在も日々努力を重ねています。

また従来はあまりいい治療法がなかった遺伝性疾患である多発性のう胞腎の治療にも最近は力を入れています。耳慣れない疾患かもしれませんが、有病率から考えるに、この疾患でありながら治療法の説明を聞いたことがない患者さまがこの地域にもまだ結構いらっしゃると考えられますので、該当する方の診察をさせて頂ければと思います。

血液浄化の面では、血液透析で培った知識と技術を活かし、血漿交換・血漿吸着療法、血球除去療法、腹水濾過濃縮ろ過静注療法などの各種アフェレシス治療も行っています。更に透析医療に関しては、血液透析と比較して通院頻度が少ない腹膜透析療法の管理も行っています。新型コロナウイルス感染症で一般的になってきた在宅業務中の方にも適した治療法ですので、このような治療に興味のある方も一度ご相談頂ければと思います。

新病院になってからは透析室を腎臓内科病棟に隣接させるなど患者動線にも配慮した設計になり、一段と患者さまの視点での医療という面でも配慮をしています。更に年に数回、腎臓病教室を開催しており、日頃の診察では十分に説明や指導のできない事柄を補うようにしています。

iPS細胞などを利用した再生医療技術を駆使しても、腎臓は複雑な構造であり、残念ながら現時点ではヒトの腎臓再生はできません。そのような中、少しでも腎臓内科領域の医療を通じて皆様のお役に立ちたいと考えておりますので、どうぞこれからもよろしくお願いします。

「新病院における整形外科の紹介」

副院長/整形外科部長　岩　﨑　幹　季

整形外科は、脊椎外科・関節外科・スポーツ整形外科・手外科・リウマチ科の各専門領域を主軸にスタッフ17名、専攻医（後期臨床研修医）３名の総勢20名体制で外来・入院診療を行っています。

骨軟部悪性腫瘍以外の主な整形外科疾患には、ほぼすべて対応しています。骨折手術も重要な診療対象ですが、各専門的技術を要する毎日の手術枠外で対応しているため、近隣の登録医の先生方にはご迷惑をおかけしていると思います。当院で診療中の患者さまや専門技術を要する外傷に関しましては、症例に応じて対応しますので適宜ご連絡ください。

手術件数は整形外科全体で概ね1,500～1,600件を超えていますが、その概要は以下の通りです。脊椎外科では新病院で新く導入した術中３D撮影可能なCアーム（Cios Spin）とナビゲーション（BRAINLAB）を駆使した脊柱変形（側弯症、成人脊柱変形）に対する矯正固定術、腰椎変性疾患に対する除圧・固定術、頚椎後縦靭帯骨化症や頚椎症に対する椎弓形成術や前方除圧固定術；関節外科ではナビゲーションシステムを活用した人工股関節や人工膝関節置換術；スポーツ整形外科では関節鏡視下での靭帯再建・半月板手術や軟骨修復術；手外科では上肢外傷や末梢神経障害に対する手術；リウマチ科では生物学的製剤や骨粗鬆症に対する薬物治療に加えて外反母趾手術など各専門的手術を中心に施行しています。

今後も大阪南部の基幹病院として質の高い専門的治療を提供していけるよう整形外科スタッフ一丸となって努力していく所存ですので、患者さまのご紹介や相談などよろしくお願いいたします。

参考URL：https://www.osakah.johas.go.jp/section/orthopedic_surgery

＜各専門分野の外来日＞

	月	火	水	木	金	担 当 医 師
脊椎外科	○	—	—	○	○	岩﨑幹季、長本行隆、松本富哉 高橋佳史、古家雅之
関節外科	—	○	○	—	—	山村在慶、小柳淳一朗、福永健治 上山秀樹、竹村　進
スポーツ整形外科	○	—	—	○	○	衣笠和孝、橘　優太、田中綾香
手 外 科	—	○	○	—	○	遠山雅彦、飯盛謙介
リウマチ科	○	○	○	—	○	坪井秀規、岡村元佑

「新病院におけるリハビリテーションの特徴」

中央リハビリテーション部長　田　上　光　男

●リハビリテーションの進化（深化）

新病院では急性期病院機能として、リハビリテーション分野も進化しています。リハビリテーション室（1,100㎡ 奥行36m、横に35m）は２階にあり、入口には生体モニタリングを実践する心臓リハビリテーション（80㎡）と診察部門、長いＬ字歩行路（60m）を配置したPT部門、３つの個室空間のST部門、最奥部にはお風呂・調理のシミュレーションができるOT部門がワンフロアのオープン空間に配置されています。また、リハビリ治療は急性期化するほど療法士の活動する場所はリハビリ室から病棟内での活動へとシフトする必要があります。したがって、病棟での離床活動を促進するために９階・８階病棟にサテライトリハビリ室（23㎡）を設置しています。

治療提供は理学療法（PT）・作業療法（OT）・言語聴覚療法（ST）の各療法士が①脳・関節チーム、②スポーツ・がんチーム、③呼吸循環・脊椎チームの３チームに配置され、専門的治療を実践しています。所属チームによっては１日の大半を病棟での離床支援に費やすこともあります。特にSTは摂食嚥下評価とアプローチのために病棟間を縦横無尽に活動している状況です。チーム活動が活性化するほど、主治医・病棟スタッフとの多職種連携は深まり、リスク軽減、治療の質向上が図られます。リハビリテーションもハード面、ソフト面ともに進化（深化）し続けているところです。

●治療実績

リハビリテーションニーズは年々増加しています。2021年度は3,452人の患者さまがリハビリテーションを受けられ、疾患別リハビリテーションの総治療件数は年間62,000件（１日当り259件）となっています。その内リハビリテーションを受けられた患者さまの80.1％は直接ご自宅に退院されます。

この値は急性期病院として非常に高いもので「安静は危機（毒）、運動は良薬」の概念のもと、病棟スタッフとともに積極的に離床を進めていることが自宅退院率の高さに反映していると考えます。

●温もりのあるリハビリテーションスタッフが迎え入れます

リハビリテーション科・中央リハビリテーション部には２名のリハビリテーション専門医、１名の看護師、21名のPT、10名のOT、５名のST、３名の事務員の総勢42名が配属されております。リハビリテーション活動空間も大きく変わり、リハビリ専門職の働き方も変容しています。私たちは治療回復サポートのみならず、自宅復帰、治療と仕事を考えた両立支援までカバーする専門医療職です。患者さまの声に耳を傾け、ともに目標を作り、温かく寄り添ってサポートさせて頂きます。入院中のリハビリはご安心ください。

図１．リハビリ室風景

図2．リハビリスタッフ

独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院（高度型）
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曽根町１１７９－３
TEL　072－252－3561（代表）
　　072－255－8076（メディカルサポートセンター）
FAX 072－255－8203（メディカルサポートセンター）
http://www.osakah.johas.go.jp/